

1. 阿賀野市の概要と沿革

阿賀野市は、新潟平野のほぼ中央に位置し、南側に大河阿賀野川が流れ、東側に標高1,000メートル級の山々が連なる五頭連峰を背にして形成された扇状地に6,500ヘクタール余りの水田が広がる穀倉地帯です。

県都新潟市から南東へ約20キロメートル、東は新発田市、阿賀町、西は新潟市、南は五泉市、阿賀町、北は新潟市、新発田市にそれぞれ接しています。磐越自動車道と国道49号が南北に、国道460号と290号、JR羽越本線が東西に走り、県都に隣接する自然環境豊かな地域です。

阿賀野市は、東西約18.5キロメートル、南北約15.3キロメートルで、192.7平方キロメートルの面積を有しています。地目別に見ると、農地が73.2平方キロメートル、宅地が12.1平方キロメートル、山林64.8平方キロメートルとなっています。

阿賀野市の気候は、日本海気候に属していますが、冬期間でも近年の暖冬傾向により、小雪で日常生活に支障が出るようなことはありません。春から夏にかけて、阿賀野川の水面を渡るように、時折強い東南(ダシ)の風がこの地域を吹き抜けます。

自然山水はすべて五頭山脈に源流を發し、東から西又は北西に向かって流れていてその主なるものは、北から折居川、大荒川、安野川、ツベタ川があります。ほかに人工用水路として、小松地先阿賀野川から取水し山裾を北上して新潟東工業港へと延びる阿賀右岸大規模用水の幹線及び支線、水路が管内殆どの農地を潤すとともに、農閑期でも大切な消防水利となっています。

道路網は、磐越自動車道が南部を横断し、市内唯一の安田インターチェンジがあります。国道49号が中心部を貫いて、新発田・新潟を結ぶ国道460号と交差しており、更に国道290号が山沿いを走り五泉市へと延びています。県道は、市街地から放射線状に、水原・出湯線、大室・水原線、新関・水原停車場線、新潟・長浦線等があります。

平成6年7月28日、磐越自動車道、安田インター・新潟中央インター間が、平成8年11月14日安田インター・津川インター間の供用開始、平成9年10月1日全線開通により新潟市はじめ県内外からの交通アクセスがより良くなりました。

JR羽越線新津・新発田間が平野部を南西から北東に走り、「きょうがせ」、「すいばら」、「かみやま」の3駅があります。

阿賀野市は、有史以来交通、経済、文化、軍事の要衝となり、徳川時代には幕府直轄の奉行所や代官所が置かれ、廃藩置県前後の明治2年には越後府が置かれ水原県となり、やがて新潟県と変遷したことから新潟県政発祥の地であるという自負もあり、平成7年8月には水原代官所を復元しました。

市内の安田地区、笹神地区、京ヶ瀬地区は支配系統の異なる新発田領でしたが、日常生活、経済活動に最も密接な水原地区の市場を中心に共同生活圏が生成され一体感が培われ今日に至っています。

これらを背景として昭和41年4月旧町村及び消防機関の協議会の総会において広域消防早期実現の決議がなされ、この方針に則り、県の助言指導を受けながら事務担当者から消防機関、町村執行部、議会へと段階的に広く研究協議を重ね、紆余曲折の末、昭和45年10月1日から救急業務を旧水原町に委託する方法により開始し、昭和48年4月1日一部事務組合が発足し、常備消防だけではありますが一体化が実現しました。

その後昭和54年4月1日、阿賀北広域組合水原郷消防本部が発足。

平成16年4月1日、水原町・安田町・笹神村・京ヶ瀬村が町村合併し、阿賀野市が誕生、阿賀野市消防本部となり、平成26年に10周年を迎え、消防力強化のため旧各町村にあった分遣所を統廃合し、新たに安田地区の新潟県東部産業団地内にかがやき分署を開庁、1本部2署体制になり、現在に至ります。